# ポルトガルの文化的ハイライトトップ10

## について

写真: arquivo Turismo de Portugal

**ポルトガルの文化的ハイライトトップ10**

**ポルトガルの文化とこの国の地政及び歴史の間には密接な繋がりがあります。ポルトガルは欧州最古の国家であり、その大西洋沿岸という地政が地理上の発見の踏切台になっていました。ポルトガルの文化的遺産はアフリカ、アメリカ、および、アジアの影響を受け、建国以前から定住していた人々により、また当然のことながら、ポルトガル人本来の親しみやすく歓迎的資質によって特徴づけられてきました。**

**世界遺産**
ポルトガルには有形、**無形の世界遺産が17件**
あります。これらには記念碑、歴史的市街地、景観、無形遺産が含まれます。下記の「関連コンテンツ」にはそれぞれの詳細が記載されています。
シントラが分類するまで**文化的景観**
という分類項目が存在していなかったことは注目に値します。これはUnesco（ユネスコ）が歴史と文化が豊かな名所や農場が散在する山や自然景観にあふれるこの華麗な自然景観を対象として、特に新設したものです。

**タイル**
タイルはポルトガル建築の定番的特長です。家屋、教会、宮殿その他の建造物の内装や外装の装飾としてこれほどふんだんにタイルが使用されている国は他にありません。イスラム教徒に発祥したルトガルにおけるタイル生産は15世紀の終わり頃に始まり、19世紀に最盛期を迎え、青と白のタイルが特徴的です。
タイル史はリスボンの**国立タイル博物館**
で知ることができますが、この極めてポルトガル独特の装飾美術の繊細な事例を鑑賞するには鉄道で旅し、都市を訪れたり、リスボンの地下鉄（メトロ）に乗車すれば十分知ることができます。

**マニュエリーノ建築**
全欧州にゴシック大聖堂が建設されていた頃、ポルトガルに天球儀等の海洋や王家の権力に基いて着想された要素を特長とする建築及び彫刻の様式が導入されました。この建築様式はその後マニュエリーノスタイルと呼ばれるようになりました。この名はD.マニュエル王（1495-1521年）の統治下に確立したのでその名が付けられました。その当時はポルトガルによる地理上の発見の最盛期であった時代であり、
最も著名な様式としては、
**ジェロニモス修道院、ベレンの塔、バターリャ修道院、及び、トマールのキリスト教修道院（コンヴェント・デ・クリスト・エン・トマール）**
が挙げられます。しかし、マニュエリーノスタイルの建造物や装飾は国内全域で教会、宮殿、さらし台に採用されたほか、民間建築にも見られます。

**バロック**
バロックはD.ジョアン五世(1707-1750年)統治下に金や宝石がブラジルから輸入されポートワインの輸出が始まった時代を特長付ける華麗さと虚飾の代名詞です。この時代は
**マフラのコンベント、リスボンの「自由の水路」、コイン**
**ブラ大学図書館**
等偉大な建造物により特徴づけられます。しかしギルトの彫刻やタイルで装飾された教会等の実例は全国的に見られます。北部地方で特に注目に値するもの
にはイタリア芸術家であり建築家であったニッコ
ロ・ナソーニが設計したポルトの**クレリゴスタワーと教会**
及びヴィラレアルのマテウスパレスがあります。リスボンにある**国立バス博物館**
のとっぴなコレクション等その他のものもあります。

**村と都市**
ポルトガルはその遺産及び建築で有名です。世界遺産都市のほかにも多くのものが知られています。これらには北部のヴィアーナ・ド・カステロ、ブラーガ、カミーニャ、バルセロス、ポンテ・デ・リマ、アマランテ、中部のヴィセウ、さらに、リスボンから近いサンタレームやセトゥバル、アルガルヴェ地方のタヴィーラおよびシルヴェス、マデイラ諸島のフンハルおよびポンタ・デルガーダ、また、アソーレスもあります。
北部のロマネスクがここ
そポルトガルの生地であったことを明確に表す一方、
ポルトガル中央部にある**国境地帯の城や歴史的村落**
も約9世紀の歴史
を伝えています。同様に、シスト
の村々および多くの壁で囲まれた村や町、なかでも、オビドス、**マルヴァン、モンサラス**
はその一例に過ぎません。アレンテージョの特徴は大理石製の一階建て城壁の家屋です。アルガルヴェ地方の家々同様に屋根にテラスが設けられています。
ポルトガルの名前を名声にまで高めた、二名のプリツカー受賞者を含め、多くの現代建築家に恵まれています。1992年に受賞したアルヴァロ・シザ・ヴィエイラ及び2011年の受賞者エドゥアルド・ソウト・デ・モウラがその二名の建築家です。

**神聖な地**
ポルトガルの本土と諸島部全域には一見の価値がある多くの神聖な名所があります。中でもファティマの聖母マリアの祈りがそのメッカです。一覧可能な全名所のなかでも聖堂は国内どこに行っても一見の価値があります。これらの全てがポルトガル建国の時代まで遡るもので、その後の芸術家による運動の影響を受けています。最もよく知られ訪問客が多いサイト以外に「インペリオス」と呼ばれアソーレスの精霊祭および、聖ミゲル島でのセニョール・サント・クリスト・ドス・ミラグレスにまで関連する村における宗教的建造物の表現形式について説明する価値があります。
ムーアの時代から現在まで生存している聖地はほとんどありませんが、アレンテージョにあるメルトラの町立博物館だけは訪れておきたい例外的存在です。
幸運なことに中世の名残を持つユダヤ教という異質な宗教的名所も国内全域に散在しています。例えば、トマールにある古代のシナゴーグ（ユダヤ教の聖堂）をはじめ、特にスペインとの国境の側のベルモンテ、グアルダ、トランコソ、カステロ・デ・ヴィデは是非一見しておきたいものです。

2013 ポルトガル観光局 無断転載・転用禁止
info@visitportugal.com

©Museu do Fado

**ファド**
ファドは2011年に無形世界遺産に指定されました。長年ファドはアマリアの名前と関連付けられていましたが、今日では新世代のファドの歌い手は人気が高く、マリザ、ギセラ・ジョアン、カマネ、カルミニョ、アナ・モウラ等の歌手は国際的舞台で有名になった人の一例にすぎません。
ファド、すなわちポルトガルギターの音色に込められた情感を真に体験するにはキャンドルの明かりで照らされた「カサ・デ・ファド」やファド・ハウスをおいて他にはありません。リスボンにあるファド博物館はこの極めて特徴的なポルトガル音楽ジャンルに親しむ絶好の場所でもあります。

**文学**
ポルトガルは詩人の国として知られています。建国の頃にポルトガルの試作は作詞とともに始まりましたが、ルネッサンス期にルイス・デ・カモエス(1524-1580年)がポルトガルの地理上の発見の偉業を語った「ルシアダス」出版の頃に最盛期に達しました。20世紀にポルトガルの詩は最も翻訳されているポルトガル詩人フェルナンド・ペソア(1888-1935)の作品により世界に広まりました。しかし、ノーベル賞を1998年に受賞したのはジョゼ・サラマゴ(1922-2013年)の散文学でした。

**祭りおよびフェスティバル**
ポルトガルは特に夏季にヴィナーナ・ド・カステロ、トマール、カンポ・マジョール及びフンハル、マデイラ諸島の花祭り等の伝統行事で活気を帯びます。ポピュラーな聖人のパレードを見ないわけにはいきません。そのピークはリスボンでは6月13日、ポルトが6月24日です。
また、ロックからジャズまで豊富なジャンルを特集したミュージック・フェスティバルもあります。実際にはどんな趣向にもお気に入り曲が見つかります。上演会場は安価な入場料と同じほど時には魅力的に飾られます。スドエステ（東南）フェスティバル、コウラのパレード、スーパー・ボック・スーパー・ロック、ノスアライブについてこれは言えます。

**外食の楽しみ**
今日ポルトガル料理への興味は増えつつあり新人の青年シェフが現代的センスの良さを伝統的風味とレシピに組み合わせて楽しませてくれます。ポルトガル料理の5大特徴をハイライトする価値があります。世界最高の魚、「カタプラナナ」（地中海料理の生きているシンボル）、ポートワイン（唯一無二)、ポルトガルのカスタードタルト（「極楽のような甘さ」）、そしてポルトガルのシェフ（伝統に革新と創造力を結合）。以上の項目は全て、ユネスコが近年にポルトガルを地中海料理の国として承認した原則に沿っています。さらに、ポルトガルでは客を饗すあるいは社交の焦点は食卓であり、どの食事も共有の瞬間です。

2013 ポルトガル観光局 無断転載・転用禁止
info@visitportugal.com